

編集後記

一九九五年という年はたいへんな年であった。年明け早々の大地震、それに追い撃ちをかけるような不気味なカルト集団による陰惨な事件。中国とフランスの核実験、イスラエルのテロ、いつ果てるとも知れぬボスニア・ヘルツェゴビナ紛争。日本も、世界も、暗く、閉塞状態のなかで明け暮れた感がある。

目を学内に向けても、十八歳人口の漸減による財政難、また、早稲田祭問題や新学生会館問題などをめぐる騒ぎがあり、なんとなく落ち着かない一年だった。

早稲田大学図書館では一九九五年二月に、『早稲田大学図書館の課題と将来構想』と題した小冊子を刊行し、今後十年ほどのスペースで見た図書館の将来構想を示した。岡澤憲美館長が当紀要前号の巻頭言で書かれているように、図書館は好むと好まざるとにかかわらず、その社会的機能・役割を大きく変質させてゆかざるを得ない。時代が図書館に議論を挑んでいる。

このような認識のもとに編纂された『課題と将来構想』であるが、もっかその構想の具体化、実現へのステップを摸索してい

る最中である。学内の利用者、とくに若い研究者を中心に意見を拝聴している。また新しい試みとして、「選書アドヴァイザー制度」も秋に発足した。

◆ 今後の課題はまず、ハード面としては雑誌センター構想の具体化、中央図書館地下三階部分の利用についての具体化であり、内容的な検討としては、きわめて近い将来に現実のものとなるであろう電子図書館の到来に備えて、マルチメディア・コンテンツカナリーの整備が必要となるであろう。当「図書館紀要」は館員の研鑽発表の場としての初心を失うことなく、編集・刊行を続行してゆきたいと考えている。

◆ 一九九五年三月、当図書館館員の岩佐直人氏が詩集『靈岸』（一九九四、思潮社）により、「日氏賞」を受賞された。さっそく受賞作品を「稲門ライブラリー」に収め、ながく保存することとした。

◆ 一九九五年八月、元館員の菅原通氏が亡くなった。九四年一月を限りに選択定年をとって退職され、九五年四月から東洋英和女学院大学で図書館学の教壇に立たれていた。まだ五五歳の若さであった。菅原氏

は当紀要にも多く執筆され、『課題と将来構想』の編集・執筆にも多大な貢献をされている。心よりご冥福をお祈りしたい。

◆ 前号で「洋学特集パート2」とすると書いたが、思いのほか原稿が集まらず、特集を組むことができなかった。また今後の課題としておきたい。

◆ 今号より編集体制が少しかわり、編集事務局を担当していた藤原秀之（国内図書館担当）が退任し、長岡三智子（総務担当）が事務局担当となった。従前同様よろしくお願い申し上げる。

（記・松下真也）

早稲田大学図書館紀要 第42号

一九九五年十二月三十一日 発行

編集 早稲田大学図書館紀要

編集委員会

発行人 安江 浩

印刷所 凸版印刷株式会社

発行所 早稲田大学図書館

東京都新宿区西早稲田一ノ六ノ一

〇三(三)〇三(四)四一